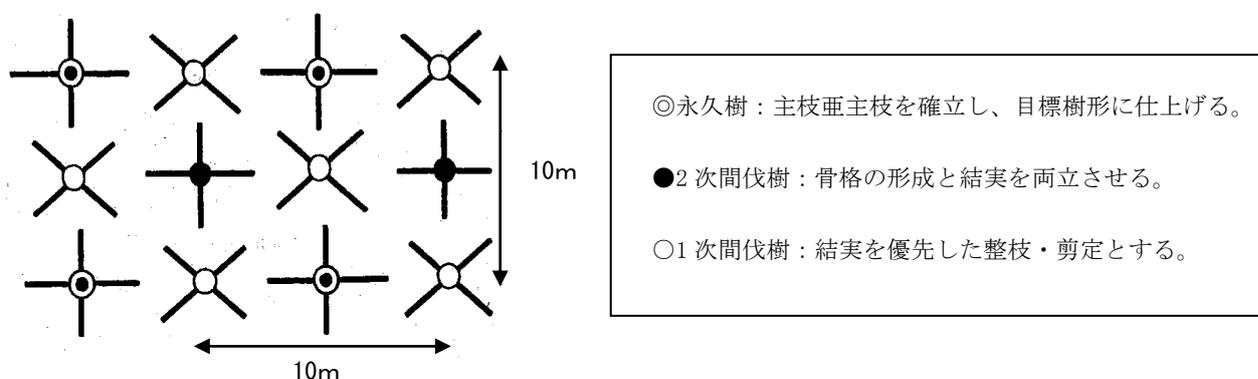


## 1. 南水整枝剪定のポイント

### ✿ 間伐・縮伐

5m×5m植え（又は 4m×4m）では、8 年目以降、主枝等の交差が多くなるので、縮伐・間伐を計画的に実施する必要がある。間伐が遅れると、混み合いから、主枝先端部分が弱り、樹冠拡大が遅れる。8 年目を目安に 1 次間伐の縮伐を開始し、10～11 年程度を目安に、1 次間伐を終了させる。



上図：計画密植での主枝の配置

- ◇ 間伐にあたっては、遠い位置まで落ち着いた花芽をつけるために、骨格枝として亜主枝を育成することが必要となる。成木では、4 本主枝を基本とし、各主枝に 2 本ずつ計 8 本の主枝を配置することが基本である。亜主枝の位置付けができていないか、主幹に対して太すぎる枝（特に樹冠内部）がないか、確認する。



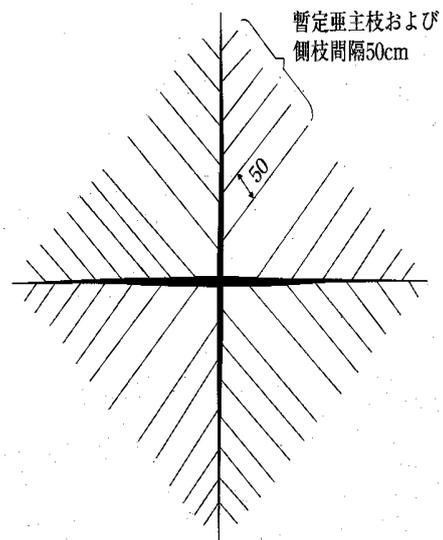
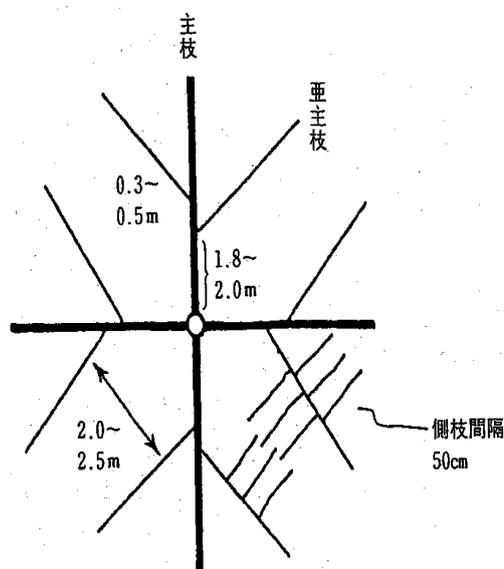
## ✿ 垂主枝の育成

① 現在発生している若い枝から良い位置のものを選び、養成する。

- 主幹部から 1.8m程度に第一垂主枝、その 50~60cm 先に第二垂主枝
- 垂主枝間隔は、2m以上空ける。

② 将来、側枝（結果枝）を多く配置するための枝である。側枝の候補となる横部からの新梢が発生しやすいよう誘導する。

- 枝の樹勢を強化する。 → 先端部を強化し、枝全体の着果負担も減らす。
- 切り口部分（潜芽の発生部分）を確保する。 → 短果枝群をある程度基部から整理（切除）する。



## 2. 芽すぐり（花芽整理）の目的

結実が不安定な品種（品目）は、開花前までに有る程度芽すぐり（花芽整理）を実施しておく必要がある。そうすることで、開花時の受粉能力を最大限に高めることができる。

特に南水等は、結実が毎年不安定で、どうしても芽数を確保しておきたくところであるが、逆に芽数が多すぎると、開花時に貯蔵養分の競合がおき、結果として結実不良のなるパターンが多い。芽数を思い切って制限することは勇気のいる作業であるが、花の能力を最大限に高め、結実安定を図るため、整枝剪定と並行して積極的に実施したい。

### ✿ 芽すぐり（花芽整理）のポイント

- ① **1短果枝当り1~2芽を残す**。主枝・垂主枝に片側15cm間隔で、横向きか斜め下向きの短果枝群を残し、上芽と下芽は基本的に切除すること。
- ② ショウガ芽（短果枝群）を整理して貯蔵養分の消耗を防ぐ。通常はハサミで位置の悪い短果枝を中心に切除するが、葉枚数の確保を含めて、手で花芽を欠いてもよい。
- ③ 側枝の横向き（外側向き）の芽を2芽残す。上向きの短果枝は日焼け果になりやすいので切除すること。
- ④ 基の花芽に切り戻さず、果台を積み上げ、外に開いたように整理する（花芽の間隔が広くなり、受粉や袋掛けの作業が楽になる）
- ⑤ 横向き、斜め上向きなど欲しい方向（着果させたい方向）の花芽を残すことで、良質の花芽に養分を集中させ、幼果の肥大促進を図るために必要な管理。樹勢を保ち、肥大を促すことで、くぼみ果、条溝果の低減も期待できる。
- ⑥ 着果負担を減らして樹勢の維持、葉の増加も図ることができ、日焼けの防止にも役立てたい。



芽すぐりの例  
斜め横向きまたは斜め上の芽を残すこと。



(参考資料)

## 1. ナシ生産基盤維持・生産性向上対策

### ● H29 年度生産計画

和梨：面積 17 ㊦ (前年 ▲2 ㊦) ・部会取扱量 55,000 箱 (5 kg) ⇒275 トン

西洋梨：面積 6.5 ㊦ (前年 ▲0.5 ㊦) ・部会取扱量 37,000 箱 (5 kg) ⇒185 トン

他品目 (ぶどう他) への転換等あり、ナシ類全体の面積は減少中。和梨 (南水) は導入から面積を拡大維持 (20 ㊦) してきたが H28 から減少。西洋梨はここ 3 年間面積維持 (7 ㊦) してきたが H29 以降は微減予想。

### ● 生産計画量達成のための目標反別収穫量

和梨：2,500 kg (2.5 トン) /10a

西洋梨：3,000 kg (3 トン) /10a

### ● H28 主要品種の反別収量

南水平均 (大口)：2,300 トン/10a (大口)

南水平均 (全体)：1,800 トン/10a (全体)

ラフランス平均：3,000 トン/10a (大口)

ラフランス平均：2,700 トン/10a (全体)

### ● 南水剪定の課題

- ① 間伐対策 (永久樹の明確化)
- ② 永久樹の樹冠拡大
- ③ 若い側枝の更新 (5~6 年で随時更新)
- ④ 花芽整理の徹底
- ⑤ 授粉樹の適宜導入